

飛身長目

森信三先生参究誌

通巻153号 平成28年8月1日発行

「修身教授録」探求（第百十七回）

四十までの歩み

森信三

■無自覚の船出

すべて物事というものは、もう無準備無計画になされたのでは、どうしてもうまくは行かないものであります。ところが我々のこの一生というものは、我々があらかじめ意志し、計画して生まれてきたものではありません。したがってこの人生に対して大きく見通しをつけ、準備計画をして進むという人は意外に少ないようであります。それというのも、そもそもこの人生というものは、我々にとつてあらかじめ計画して、しかる後に出発するのではなくて、すでにあるところまで達してから初めてそれと気付くものだからであります。すなわちわれわれは人生の只中において初めて目を覚まし、自らの過去を顧みるとともに、それに照らして前途をも展望し、常に将来の見通しをつけつつ進まねばならぬからであります。このように人生というものは、他のことと違いまして、その出発前に当たってあらかじめその全計画を立てて、しかる後に出発するということのできないものであります。

■気づきは早く「おぼしき」

すなわち我々の人生はまず無自覚の中に出発せしめられるものであり、したがってわれわれは人生の計画をその途上において立てなければならぬというところに、多くの人々が二度となないこの人生を空しく過ごす根本原因

があると思うのであります。が、しかし幸いにしてわれわれは、なるほど自分自身としては二度と繰り返し得ない生涯ではあります。が、しかし先人のたどった足跡は、その伝記によって自由にこれを吟味することが許されているのであります。さればこの点に気づかないならば、いかにもがいても結局人生を空費する他はないであります。

さて只今も申した様に、我々は人生の計画を立てる前に、すでに人生の船出をしているのであります。それは今たとえを以て申してみれば、何ら行き先の目当ても決まらないうちに、風の都合で船はぐんぐん岸辺を離れているというのと同様であります。かような次第でありますから、一生の計画というものは、いかに早く立てても決して早すぎるといふ事はないわけです。ですから人間の偉いか偉くないかは、その人がどれだけ早くから人生の見通しをつけるか否かによって分かれるといえましよう。このことはあるいは二宮尊徳翁とか、あるいは吉田松陰先生などの伝記を窺えば何人にも明らかであります。今日国家社会においていやしくも一流と言われているほどの人々は、いずれも相当早くから生涯の方向を打ち立てた人と申してよいでしょう。

（この時突如として「一同起立！」凜然たる号令を下され、ついでに上肢屈伸、拳振百回を命じられる。けだし本日は稀に見る寒気厳しき日なればなり。しかしお陰にて一同の身体が温もった。）

■四十までの過ごし方

そこで今諸君の前途についてであります

が、もちろんこれは人によってそれぞれ違いますが、もちろんこれは人によってそれぞれ違わずのものとありますが、同時にまた一般的に考えて、多少ご参考になるようなことを申すのも、必ずしも無意味ではないでしょう。さて諸君の将来を考えるにあたって、一番大きな区切りは、何と申してもまず四十歳というあたりにあるかと思えます。人間四十以後の事は、第一私自身にもまだ多くを過ぎしていませんので、これを申す資格がないのであります。また事実においても四十以後の事は、四十までの道行きさえ真に充実して歩いたならば、それから後はまずおのずから開けてくると考えてよからうと思えます。

■これからの覚悟を

そこで何としても大事なものは、前半生としての四十前後までの生き方であります。そうしてこれを真に命がけで生きるといふ覚悟が最も大切だろうと思えます。つまり一口に申せば、諸君はこれから四十までの二十一年間を全く修行期にあるものとして、少しも頭を上げないで、地を這っていく覚悟ができるかどうかの問題です。これを水泳で申せばいわゆる「潜り」の呼吸であり、またこれを戦争で申せば蹲（うづくま）って這（は）い、這っては蹲くまわりいく姿勢であります。しかるに人生の見通しのつかない人間は、学校を卒業すると同時に、もう頭を上げてノウノウと歩き出す。これはちょうど「潜り」の稽古をしたことのない素人が、頭を水に漬けはしても、すぐ顔を上げると同様です。またこれを戦争で言えば、うかうかと立ち上がったところへビュと敵弾が来て倒れるのと同様です。これに反しもし諸君にして二十一年間伏せの姿

勢、潜りの覚悟を失わなかったならば、諸君の素質如何にかかわらず、必ずや多少のご奉公のできる人間になろうかと思うのであります。

■三十までは書生のごとく

さてその二十年であります、一口に二十年といっても実際となるとなかなかでありますから、さらにこれを二つに分けて三十歳というものをその間に置いてみるがよいでしょう。ではその三十歳までを一体どういう風に過ごしたら良いかと申しますと、これを一口に申せば、三十までの二十代いっばいは職務以外の事は大体書生気質で通すということですから。職務は公のことでありますから、これを書生気質などでやられてはたまったものではありませんが、しかしその他の事柄は、例えば研究のことなどは申すまでもありませんが、その他衣食服装に至るまで、だいたい書生のつもりで最も簡素なものを以て我慢するのです。そして教育者としての教養を、だいたい高等師範または文理大学の卒業程度を標準として、必ずその程度の教養と識見を積むように必死の努力をします。このことは適当な指導者に従って、その志さえ失わなければ何ら不可能なことではありません。ただこれまでの師範卒業生にそういう人の乏しいのは、そういう決心覚悟を持つ人が無かったことと、またこれを導く適当な人を見出得なかった所から来た結果であります。大体諸君は高師とか文理大などの卒業生というところ、雲上の人であるかのように考えているらしいですが、事実は決してそんなものではありません。それこそそこにはピンからキリま

であるのでありまして、現に本校の卒業生で私の知っている範囲でも、師範を出ただけの学歴で小学校に勤めていながら、それらの学校の卒業生に比べて人物識見ともに何ら遜色のない人が相当にあるのです。

■三十までに基礎教養を

かようなわけで諸君は二十代いっばいは職務以外の事は全くの書生気分を過ごして、三十歳前後まではたとえ石にかじりついてでもほぼ高師か大学卒業程度の教養と識見を得るよう努力することが何よりも大切だと思えます。が同時にまた一人の訓導として職務を持つ身でありますから、その職責に対する勤めの大切なことはもとより申すまでもありません。要するにこの二つがあざなわれて、常々に一つに結びついていくように努力することが大切であります。それには卒業後十年間、何か一学科の研究を深めていくということももちろん悪くはありませんが、しかしさらに一方を進めて、一科目を一通り終わったならば、それと関連のある他の科目の研究に移って、だいたい十年間に一通各科目の精要を得るよう心懸けるといふことも、ひとりである切の教科を担当することをその建前とする小学校の教師としては、最も本格的な道であるうと思えます。そして実地教授法の研究に即しつつその科目の基礎理論を明らかにし、それがやがてまたその人の人間としての教養の基礎ともなり、また逆にかかる基礎的教養が、常に日々の授業の上に反映して、その基礎となり背景となっていくことは最も望ましいことでもあります。

このようにして二十代十年の間に、人とし

て教育者としての基礎的教養の地盤を築き、また一人の訓導としての各教科科目の本質とその実地の取り扱いに熟したならば、ここに三十代に入つてそれらの全てを一身に統一せんとする要求が起つてくるはずでありませぬ。その時かかる統一を得んがための一方便として哲学というような学問も要求せられてくるようでありましょう。

■哲学する意味と時期

私は真の哲学というものは、この時代にまたそうした心の要求に催されて初めて学ぶべきものと思います。ところがこれはひとり私一人の考えではなくて、実は大哲人プラトンがその名著「理想国」において述べている考えでもありません。しかし体験の統一は単なる哲学的知見のみで出来ることではなく、何よりもまず必要とされるものは、道徳的実行でありませぬ。したがつて諸君は三十の声を聞くようになったならば、とくに深く却下の実行に努めなければならぬと思ひます。同時にこの却下の実行を導いてくれる光として、「古典」の世界がようやくその頃から諸君の眼前に現れ始めるかと思ひます。もちろんかく申す事は、それまでは古典を読まなくともよいと申すのでは決してありません。しかし私の考えでは、いやしくも「古典」と呼ばれるほどの典籍は、二十代の若者によつてその真の奥底には容易に達し得ないと思ふのでありませぬ。かくして私の考えでは、二十代はむしろ

飛耳長目（ひじちょうもく）の古典の精神を現代において最も深く生きておられる若干の卓れた方々の思想を十分に体得することにし力を注ぐのがよくはないかと思ひます。そして一応この準備のできた上で、

おもむろに三十代に入つて直接「古典」の世界に入つていくというのが常道ではないかと思ひます。少なくともこれは私ごとき資質乏しき者に適した易行道ではないかと思ひます。かくして三十代は古典の光に導かれた実行と、哲学的全体観による体験の統一とに過ぎずがよいでしょう。いや古典の精神を現代生きておられる若干の優れた思想家について学ぶ事は、必ずしも二十代で終わるものではなく、三十代にもなおその必要があり、いや四十を過ぎても決しておろそかにはならぬと信じてるのであります。しかし一応の人生の安立は遅くとも四十までにはつかむ必要があり、そこに孔子の言われる「四十にして惑わず」の意味があるのであります。同時に真の人生の活動はまさにこの辺から始めて開かれると思ふのであります。古人も「四十にして仕う」といつたように、お互いに四十までは修業期でありますから、それまでは地を圃（は）い水底を呼吸一つしないで一気に潜つていくような態度精神がもつとも大切と思ふのであります。

■時局に鑑みて

さて以上は一応教育者としての常態の見通しについて申したのであります。もちろん今日の時局下においては、このような常態のみを期待することのできない事は申すまでもありません。いや時局の推移如何によつては、諸君らの大部分の人が銃剣をとつて起たねばならぬことともなりましよう。そもそも召に應じて銃剣をとるということは、私ども「醜の民草」としてその全生涯を一点燃焼せしめて捧げ切るといふことでもあります。したがつ

てその燃焼度のいかんは実はこの常態における人生の達観侵徹の度と正比例するのであります。それ故もしかくのごとき人生に対する通観の智を以て生温い態度などと考へている人があつたならば、それは未だ真実に道というものの跡を解しない人という他ないでしょう。実際我々日本国民は召に應ずる前日までは、いやその一刹那まで自己の職責に対して、全真実を傾けるでなくてはなりません。でなければ一旦召に應じて戦場に出で立つても決して充分なるご奉公はできないのであります。諸君はただ戦場に出さなければ誰でも皆同様にご奉公できると考へているかもしれませんが、それは観念的な考へというものです。戦場でのご奉公にも、人によつて相違の生じるところに現実界の現実界たる所以があり、そしてその相違というものが、結局は平常態の真実の如何に比例することを思へば、今日の時代といへども、一応はまずこの教育者としての常道について申さねばならぬ次第であります。召に應ずる覚悟についてはいづれまた申す時があらましよう。では……。（杉本恒男記）

〔修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊〕

森信三先生「自身の来し方に照らし、若い眼前の学徒に真摯に語られるこの真実。今お聞きしても耳朶に残るであらう。（二繁）

水素爆弾の登場と人類

（微言）

森信三

○国際間の情勢の変化は刻一刻とその深刻さを深めつつある。米大統領領がついに水素爆弾の製造を命ずるに至つたといふことは、

人類史上空前の超重大事件であるにも拘らず、現在人々はさまでそれを驚いていない様子である。

○人類は今や史上空前の不感症状態に陥ったとも言えるであろう。人類に対する壊滅的武器が出現せんとしつつあるにも拘らず、識者も思想家も、政治家も、それに対してほとんど為す処を知らぬげに放任のままであつて、それは正に一種の痴呆状態にあるともいえるほどである。

○しかしこのことは人類全体が、何も急不感症になつたり痴呆状態になつたというこころではなくて、今や人類の歴史的段階が、一つの次元を異にする段階に移せんとする前兆というべきであろう。

○それは例えば一般のボートがナイヤガラ瀑布に向つて流れるようなものであつて、そこに結果すべきものの如何に恐るべきかについて、決して分つていないわけではないけれど、それでいて如何とも手の下しようがないのにも似ている。

○今日米ソを中心とする世界の二大対立を不可避ならしめているものと、二人の個人が相争つている場合と、ないし政党などが分裂して相抗争している場合と、その内部に働く動因において本質的に果してどれほどの相違があるであろうか。

○人類は個人としては今日ある程度の文化と教養の段階に達したが、民族主体で行動する場合、道義的観点より見て果たしてどれほど文明を誇りうるであろうか。日本が過ぐる太平洋戦において犯した過誤を、人類は今日全脱していると何人が神の前に言い得るであろう。

○人類は今日なお真に神を畏れることを知らぬといつてよい。個人として神を畏れることを知れる者の数は決して少くないが、ひと度国家主体、民族主体の立場に立つとき、今日なお人類は真に神を畏れることを知らぬという外ない。そしてその何よりの証拠は水素爆弾の出現である。

○水素爆弾の出現は、神を畏れることを知らざる人類に対して、神の如何に畏るべきかを知らしめんがために、神自身が生み出したものとも言えるであろう。即ち真に水素爆弾を恐れることを通して人類は初めて神の如何に畏るべきかを知るであろう。

○かかる現実の歴史哲学観を以て日々の新聞を通して報道せられる国際関係の展開を観ずるとき、全く文字通り歴史の神曲的展開への確証を見せつけられる思いがする。

○今日ほど世界史が神曲的展開を刻々に確認しつつある時代は、全人類史上全く空前といつてよい。その展開の速度の急と、その様相の深刻さの何れよりしても……

○しからばそは何事を語るのであるか。畢竟人類の歩みが、近き将来に於いて、人知史上空前なる一大激変を契機として、一つの高次の段階に歩み入らんとする前兆にあることを示すものでなくして何であろうか。

○その所謂高次の世界とは、今日まで個人間に於て道徳宗教的と認められたものが、国家民族の立場に於ても等しく認められ、履踐され始める世界である。即ち各国家各民族相互の間にも、個人観のその如く、道徳の履踐せられる世界である。

○かかる高次の世界は、端的にこれを言え

ば、人類が初めて神の真に恐るべきことを知り初める世界と言つてもよい。或は第三次世大戦が、人類をして真に神の畏るべきことを知らしめんがために神自身が全人類に対して下される最大の審判といふべきかも知れない。全武装を放棄せるわれらの民族以外に地上如何なる民族が、この言を否定し得る資格があるであろう。

○然らばこれに対するわれらの民族は如何にすべきであろうか。過ぐる太平洋戦における自らの過誤について徹底的懺悔反省に徹する事のほか何ものもなかるべきである。

(「微言」昭和25年2月号 通巻35号)

あとがきに替えて

昭和25年と言へばもちろん自衛隊はない。今日の我が国の状態とは軍備の上での差異はある。されど今般の世界情勢はウクライナ、南シナ海問題等に象徴されるように何ら善と大差ない。中国等の一方的な振る舞いは、国連の常任理事国でありながら、法を遵守しない。国連は形はあつても機能不全に陥っている。かかる無法国家を抑えるには第四次大戦が不可避なかと危惧する。また人類は今や宗教の名を標榜したISに手を焼いている。歴史は繰り返し、血で血を洗う宿業の消え去る秋はないのだろうか？

(30日二纂)

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話 0744-4513422

Email: hji3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn